白山の自然誌　21

白山の禅定道

2001年3月

石川県白山自然保護センター

は　じ　め　に

人が山に登るのは、ふだん私たちが住んでいる所では、見たり、経験したりできないものがあるからではないでしょうか。

それは高山植物が咲き乱れる美しいお花畑や鮮やかな紅葉であったり、雲海のかなたからの御来光や我を忘れさせる雄大な山岳景観などであり、時にはブロッケン現象などの神秘的な現象にも遭遇するかもしれません。しかし、山に登るにはそれなりに辛く苦しい思いもしなければなりません。また、突然の天候の悪化など死と直面するような厳しい体験をすることもあるでしょう。

私たちの祖先の中にはこのような下界とは違った環境を求め、自身の厚い信仰心に基づき自己の修行と研鑽のため苦行を重ね高山に登った人達がいました。現在のように登山用具や食料品等に恵まれた時代とは違い、想像以上に過酷で厳しいものがあったのではないでしょうか。

白山もこのような山岳信仰の山として、山頂を極める人が現れ、いつしかその足跡が道として整えられていくようになりました。この白山の山頂へ至る道のことを「禅定道」といいました。

「禅定道」にはその信仰の歴史を物語る史跡や地名が多く残っています。この冊子では禅定道沿いの史跡や地名を紹介し、白山の信仰の歴史についてふりかえってみたいと思います。

ブロッケン現象

表　紙　弥陀ヶ原から仰ぎ見る
白　山（御前峰）

裏表紙　絹本著色白山曼荼羅図
（辰口町立博物館所蔵）

も　く　じ

白山信仰と禅定道 ……2
　白山信仰
　馬場と禅定道

越前禅定道 ……6
　越前馬場－平泉寺白山神社
　越前禅定道を行く

加賀禅定道……11
　加賀馬場－白山比咩神社
　加賀禅定道を行く

美濃禅定道……16
　美濃馬場－長滝白山神社
　白山中居神社と石徹白
　美濃禅定道を行く

おわりに……21

白山信仰と禅定道

白山信仰

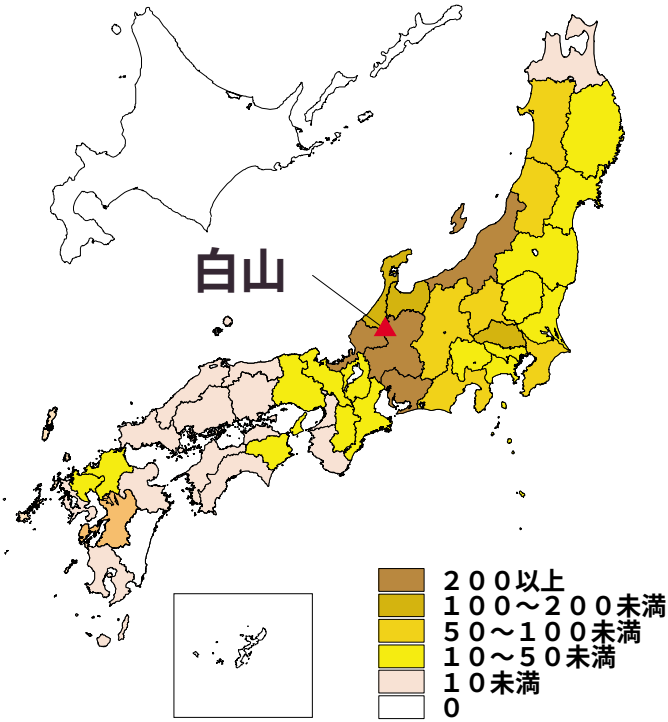
白山は古くから信仰の対象として、あがめられてきました。独立峰である白山は、平野部や日本海からその姿を仰ぎ見ることができます。山頂部は１年の半分以上を雪で覆われ、まさに白き山の姿に変わります。いにしえの人々にとって、その姿はある意味では近寄りがたく恐れ多いものであり、自分たちを守ってくれる守り神のような存在で捉えられていたのではないかと思われます。その信仰がいつ頃始まったか、正確なことはよくわかっていませんが、農業用水の源であり水神様として、また海上交通の目印として航海と漁労の守護神でもありました。

白山信仰の広がりを示すものに全国の白山神社の分布があります。大正年間の神社明細帳によれば全国には青森県から鹿児島県にいたるまで、42都府県にまたがって2,716社の白山神社があります。白山に隣接する県に多くの神社があるのはもちろんですが、遠くは九州や東北の各県にまで広がっています。これは海上交通の目印になっていたことや、後述する石徹白の「御師（おし）」による「護符（ごふ）（まもりふだ）」の配布活動などによる影響が大きいと思われます。

また、白山は京都や奈良など古代の政治や仏教界の中心地域に近く、その存在を早くから知られ「越のしらやま」として詩歌にも詠まれており、中央仏教僧も来山していました。このことからも白山は、地域的な信仰対象ではなく、全国的規模での信仰対象とされてきたようです。

山岳信仰の発展とともに最初は麓から眺め拝むだけで、神聖不可侵であった御山に登り修行する人々が出てきます。白山に最初に登り、開山したのは泰澄（たいちょう）大師と伝えられています。泰澄伝承を伝える『泰澄和尚（かしょう）伝記』によれば、泰澄は越前国麻生津村（現在の福井市）に生まれました。夢で貴女の霊告を受け、養老元年（717）、36歳の時に弟子の臥（ふせり）、浄定（きよさだ）行者とともに白山登頂を果し、頂上の翠ヶ池で最初に九頭龍王、次いで妙理大菩薩の本地（仏としての姿）である十一面観音を拝み、別山で聖観音を本地とする小白山大行事と名のる男神を、大汝峰では男神で阿弥陀如来を本地とする大己貴（おおなむち）神の三神を拝んだとされています。白山の神域のなかでも御前峰、大汝峰、別山の三峰は神が宿る中心に位置付けられます。

加賀平野(柴山潟)からみた白山



都道府県ごとの白山神社の数

馬場と禅定道

先の伝承(『泰澄和尚伝記』)では、三神を拝した泰澄は山頂に留まり千日修行したと記されていますが、白山にも修行僧が登るようになり、白山へ登る道が作られていきました。この山道のことを禅定道といいました。白山信仰を伝える文書、『白山之記』の冒頭に次の一文があります。

『加賀国石川郡味智郷有一名山、号白山、其山頂名禅定』

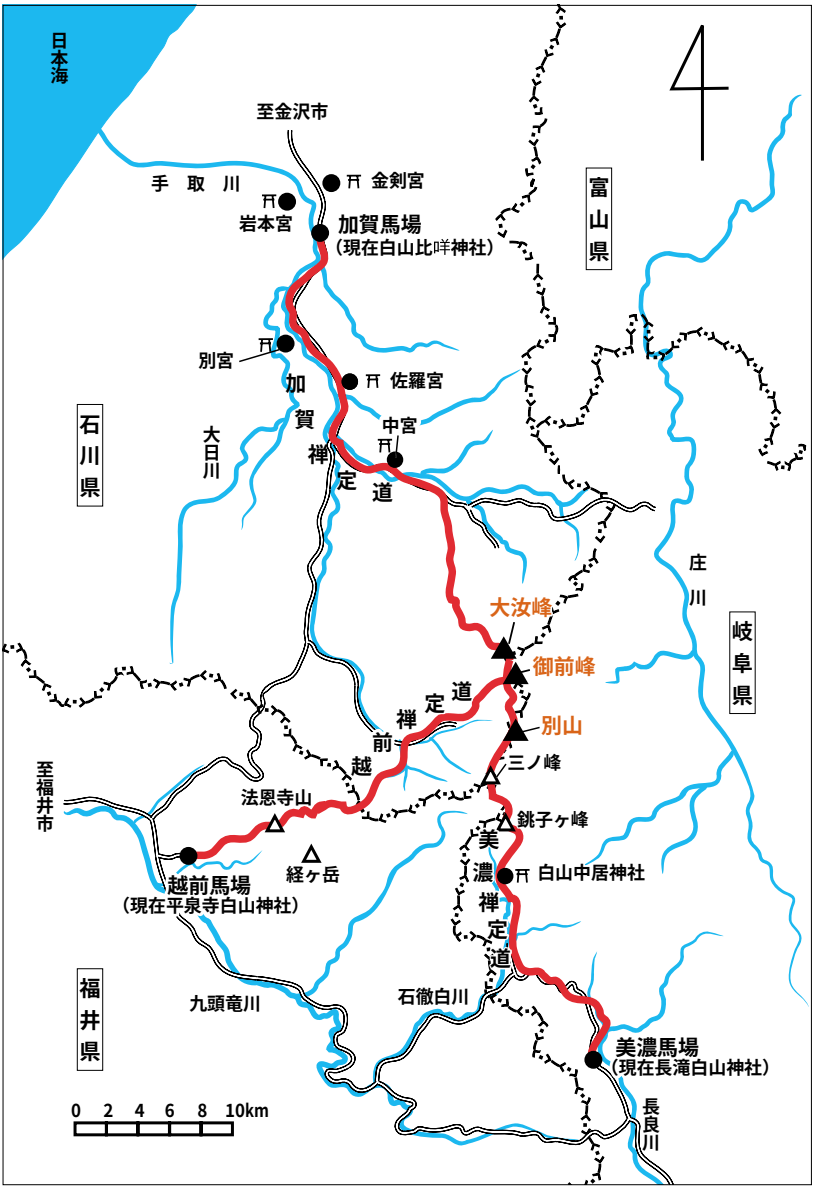
木造泰澄大師坐像
(白山本地堂収蔵)

「加賀の国石川郡味智の郷に名山がある。名前を白山と言う。その山頂を禅定と名づける」となります。この一文にあるように山頂＝禅定であり、禅定とは神や仏の住む世界で、かつその聖なる世界で修行する事を指したと思われます。白山の禅定への道は白山をとりまく越前・加賀・美濃の三国から別々に存在し、それぞれ越前禅定道・加賀禅定道・美濃禅定道といいました。

そして、禅定道の起点となった場所を馬場といいました。「馬場」とかいて「ばんば」と読み、乗ってきた馬を留め置いた場所という意味で、信仰の拠点となった場所です。各禅定道ごとに越前馬場・加賀馬場・美濃馬場が成立し、白山信仰の中心地となりました。先の『白山之記』によれば、天長 9 年(832)に三馬場が開かれたとされています。近年の白山山頂での学術調査でも 9 世紀後半の遺物が発見されており、概ね平安時代前期には三馬場・三禅定道が成立したとされています。

越前馬場は現在の福井県勝山市の平泉寺白山神社、加賀馬場は石川県鶴来町の白山比咩(しらやまひめ)神社で、美濃馬場は岐阜県白鳥町の長滝白山神社です。

なお、明治の神仏分離以前の、神仏習合の時代には神社と寺院が共存し、加賀馬場には白山寺、越前馬場は白山中宮平泉寺、美濃馬場は白山中宮長滝寺があり勢力を持っていました。また、信仰のために山に登る事を「登拝」すると言いました。禅定道の途中には祠(ほこら)があったり、山を遥拝する「伏拝(ふしおがみ)」が設けられていました。


4
日本海
至金沢市
手　取　川
金剣宮
岩本宮
加賀馬場
（現在白山比咩神社）
富山県
別宮
加
賀
佐羅宮
石川県
大日川
禅
定
道
中宮
庄
川
大汝峰
御前峰
岐阜県
禅
定
道
別山
前
越
三ノ峰
至福井市
法恩寺山
銚子ヶ峰
美
濃
白山中居神社
経ヶ岳
越前馬場
（現在平泉寺白山神社）
禅
定
道
福井県
九頭竜川
石徹白川
美濃馬場
（現在長滝白山神社）
0　2　4　6　8　10km
長
良
川

白山の禅定道と馬場

越前禅定道

越前馬場－平泉寺白山神社

越前禅定道の起点、越前馬場は、福井県勝山市の「平泉寺白山神社」です。『泰澄和尚伝記』によれば、泰澄大師が貴女のお告げにより白山に登りはじめたのはこの地からとされています。境内にある「御手洗池」はそのお告げを受けた場所で、泰澄はここに寺を創建し、寺の名を池(『泰澄和尚伝記』の記載では林泉)にちなんで平泉寺と名づけたとされています。

拝殿は、江戸時代末の建造物ですが、まわりには旧拝殿の礎石が多く残り、これから推測すれば南北45間(約81m)、東西７間(約12m)の広大な拝殿があったことになります。この奥に本殿があります。祭神は伊弉冊尊・大己貴尊・天忍穂尊です。

全盛期を迎えたのは室町時代後半で、その所領は大野郡(現在の勝山市、大野市)の大半を占め、48社・36堂・６千坊が存在していたと伝えられています。近年の発掘調査でその一端が解明されました。天正２年(1574)、一向一揆との戦いで焼き滅ぼされてしまいますが、江戸時代には他の馬場との白山の権益をめぐる争いにも、最終的に勝利し勢力を維持します。

明治の神仏分離令後は、白山の支配権も失い勢力も衰えてしまいますが、林立する杉の大木とびっしりと苔でおおわれた境内は独特の雰囲気をかもし出し、いまもその威風を留めています。

平泉寺白山神社(拝殿)
(福井県勝山市)

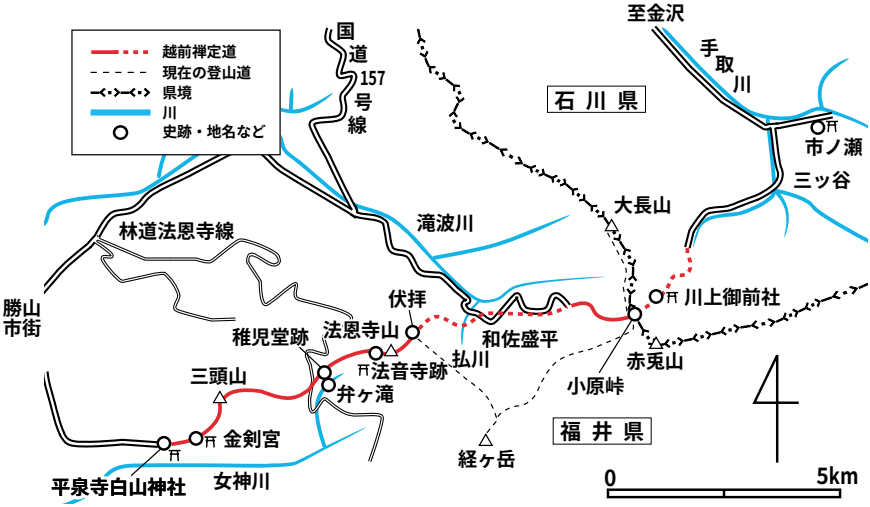
越前禅定道を行く

■平泉寺白山神社から市ノ瀬まで

平泉寺白山神社境内奥の「三宮社」が登拝の起点です。道はスギ木立の中を進み森の奥へと入っていきます。尾根伝いの道ですが、古くから多くの人々が利用したためでしょうか、道は凹んでいる所が多くあります。小さな祠のある「金剣宮」、三頭(みつがしら)山(778m)を過ぎると傾斜はゆるくなり林道にぶつかります。一帯は法恩寺リゾートとして森林公園やスキー場を中心とした開発が行われています。視界が開け、法恩寺山が眼前に立ちはだかって来ます。林道を横断し、すぐに道脇に「稚児(ちご)堂跡」があります。平泉寺隆盛の頃、和光という稚児の後を追って滝に身投げしたとされる弁の君を供養するお堂があった場所で、祠のような小屋に石仏・木札などが納められています。 二人が身投げしたとされる滝が「弁ヶ滝」で古くは修行所であったようです。このあたりは中ノ平(釈迦が原)といいます。

ここから道は森林公園やスキー場の中を縫うようにして法恩寺山を目指します。山頂の少し手前に山名の由来となった「法音寺跡」が残っています。平成12年に新たに祠が再建されました。

法恩寺山(1,357m)は、禅定道を登り続けて、はじめて遠くに白山の姿を望

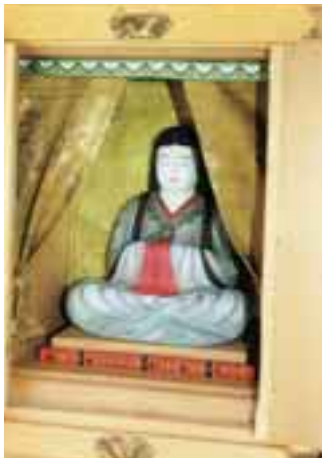


越前禅定道図　平泉寺白山神社から市ノ瀬まで

むことができる場所です。その北東側のピークは「伏拝」と呼ばれ、白山を遥拝した場所でした。現在はスキー場のリフトの終点がすぐそばまで伸びていて、時の流れを感じさせます。

法恩寺山からの白山

「伏拝」から禅定道の道は滝波(たきなみ)川の支流の払川(はらいがわ)へと下り、「和佐盛(わさもり)平」に進みますが、この間の道はしっかりとした形では残っていません。「和佐盛平」を通る林道の終点からの道は登山道として残っており、そこから「小原峠」に登ります。峠には石仏が祠の中に安置されています。ここから三ツ谷(秘密谷)へ下りますが、市ノ瀬へ続く古道は廃道となっています。三ツ谷の集落も今はなくなりました。しかし、古道沿いにあった「川上御前社」は三ツ谷出身者の手によって復元されています。祠には泰澄大師が白山の帰路、山頂で拝顔した女神を、自ら彫ったとされる女神像の複製が安置されています。



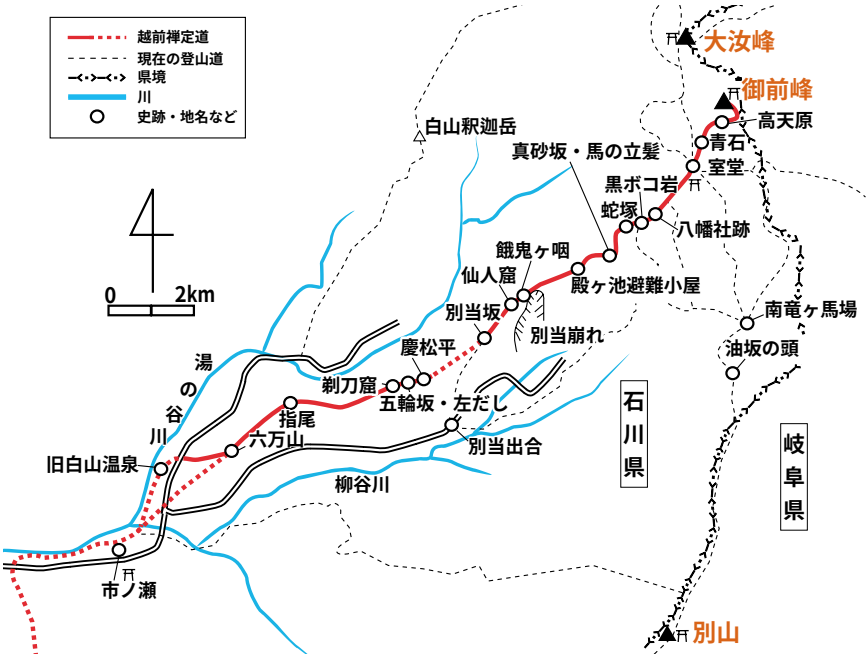
川上御前社女神像

■市ノ瀬から白山山頂へ

市ノ瀬からがいよいよ白山への登りです。かつての市ノ瀬には堂舎があり修行所・宿泊所もありました。また、江戸時代の享保年間以後白山が平泉寺領となった後は、春から秋には平泉寺の僧が常駐し、入山料を徴収していました。湯の谷側には「白山温泉」があり、湯治場としても利用されていたようです。昭和14年に建立された市ノ瀬神社にはかつてその周辺にあった堂舎の仏像が安置されています。

市ノ瀬からは六万(部)山までの急登を登ります。古くは柳谷川を渡ってすぐに一の鳥居があり、そこから登りましたが、明治以降、奥の白山温泉からの登りに変わっていきます。ここから観光新道との合流部の別当坂までの道は廃道となっていましたが、平成11年に復元されました。六万山からは尾根伝いに「指尾(1,418m)」を目指します。途中、「桧(檜)宿」と呼ばれた社がありましたが位置は不明です。「指尾」からは白山山頂部を眺めることができ、ここも「伏拝」の場所だったようで石仏もありました。ここからは岩肌がむき出したやせ尾根を進みます。「剃刀窟」は、このような岩のひとつにできた空

市ノ瀬神社



越前禅定道図　市ノ瀬から白山まで

間です。泰澄大師が髪の毛を剃った場所と伝えられ、石仏のかけらなどが多数あります。元々はもっと広かったようですが、次第に狭くなってしまいました。

「五輪坂」、「左だし」と名付けられたやせ尾根を通り過ぎるとササに覆われた平坦地「慶松平」に出ます。ここには江戸時代の頃から「慶松室」が存在していました。明治32年(1899)の紀行文にはその廃屋が描かれています。「慶松平」を過ぎると「別当坂」の登りとなり、現在の観光新道と合流します。「仙人窟」、「餓鬼ヶ咽」などの奇岩のある狭い尾根を通り、別当崩れの大崩壊地を眼下に見て、殿ヶ池避難小屋に着きます。

剃刀窟

日供祭

この後の登りはまた急になり、ガレたやせ尾根ですが高山植物のお花畑が美しい「真砂坂」や「馬の立髪」を登れば「蛇塚」そして弥陀ヶ原の平坦地の端にある黒ボコ岩にたどり着きます。「蛇塚」は泰澄大師が白山で悪さをしていた 3 千匹の大蛇のうち、特に凶悪な大蛇千匹を切って埋めた所といわれています。また、弥陀ヶ原には「八幡社跡」の石垣が残っています。ここから五葉坂を登ると室堂(2,450m)です。室堂はかつて「越前室」があった所で、今は室堂センターや「白山比咩神社奥宮祈祷殿」があり、白山山頂の中心的な施設になっています。室堂から御前峰には近年新しく整備された石畳のりっぱな登山道を踏みしめ、途中日蓮上人坐像が描かれた「青石」、石仏のある「高天原」を過ぎると御前峰山頂です。山頂には「白山比咩神社奥宮」が鎮座しています。昭和62年(1987)、落雷により炎上焼失し、翌年新しく社殿が再建されました。夏山シーズンには神職による日供祭が執り行われています。

加賀禅定道

加賀馬場－白山比咩神社

加賀禅定道の起点、「白山比咩神社」は石川県石川郡鶴来町にあります。祭神は白山比咩大神（菊理媛尊）、伊弉諾尊、伊弉冊尊です。現在の位置は鶴来町三宮（旧三宮社）にありますが、15世紀末までは手取川の安久濤ヶ淵に臨む北陸鉄道加賀一宮駅付近にありました。安久濤ヶ淵は泰澄大師が貴女から白山へ登るお告げを受けた場所と伝えられています。

平安時代には本宮四社（本宮・金剣宮・三宮・岩本宮）と中宮三社（中宮・佐羅宮・別宮）を合わせ白山下山七社と称し、当時の加賀の国主を罰するために佐羅宮の神輿を担ぎ京都まで強訴するなど勢力が増大しました。しかし、戦国時代の一向一揆により堂舎が焼き払われ、大きな打撃を受けました。江戸時代には加賀藩の保護を受けることになりますが、白山をめぐる争いが起こり（白山争論）、最終的に白山は平泉寺が管轄することになり、加賀馬場としての存立基盤を一旦失います。

しかし、明治になり神仏分離令が出されると白山山頂においても仏教色が排除され、同時に山頂部の支配権も変化していきます。平泉寺社領であった白山山頂部や旧天領（江戸幕府直轄領）の「白山麓18か村」は明治５年（1871）、石川県の所属となり、翌年白山山頂の三社や室の所属と管理が平泉寺に替わって、白山比咩神社にまかせられました。第二次世界大戦後には、白山山頂部は白山比咩神社の社有地となり現在にいたっています。

白山比咩神社（社殿）
（石川県石川郡鶴来町）

加賀禅定道を行く

■ハライ谷口から奥長倉山まで

白山比咩神社から尾口村一里野（尾添）までは、ほぼ車道となってしまいましたが、一里野から奥の山道は一部を除いて昔の道をたどることができます。特に四塚山までの古道は昭和62年（1987）に復活しました。

加賀禅定道図

古道は、中宮（吉野谷村）から尾添（尾口村）をへて尾添川支流の「ハライ谷」の谷の中を通っていたのですが、現在はこの谷を通らず、谷をはさむ形で尾根伝いに連なる二つの道に変わっています。一つは白山一里野温泉スキー場のゴンドラ終点から始まる加賀新道で、もう一つは岩間温泉へ向う主要地方道岩間一里野線の途中のハライ谷口から取りつく檜新宮（ひのしんぐう）参道コースです。今回は後者の檜新宮参道コース沿いに進むことにします。

お壺の水

「ハライ谷」を右手に尾根伝いにブナの森の中をすすみます。「ハライ谷」は泰澄大師が身を清められた場所で、登拝者を神人がお祓（はら）いをしてから山に登らせたとされており、同様に冷水で身体を清める場所を示す「垢離掻場（こりかけば）」の地名も江戸時代の紀行文に見られます。視界が開ける稜線に出た所でハライ谷へ下り、「お壺の水」へ行く標識があります。「お壺の水」は谷の湧き水が出ている場所で、「御（お）仏供水（ぼくすい）」ともいい、水は遠く金沢市の大乗寺の井戸水につながっていると伝承されています。この「お壺の水」より下流部は「水無八丁」といいます。谷も源流に近いこのあたりでは常に水は流れていないのでこの名がついたと推測されます。このあとは天池までいかないと水の取れる場所は無く、「お壺の水」は貴重な水場であることは今も昔も変わらないようです。

1800年頃の桧新宮
（金子有斐『白獄図解』（石川県立図書館所蔵）より）

「お壺の水」から稜線部にでた所が「桧新宮（ひのしんぐう）（檜（ノ）新宮）」です。名のとおりヒノキの大木が林立している所です。現在は昭和57年（1982）に再建された祠がたっていますが、付近には礎石の跡が見られ、複数の建物が建っていたようです。江戸時代後半の紀行文中の絵図には２つの祠がたっており、もと天照大神（あまてらすおおみかみ）を祀る

ことから日神宮とも記されると書かれています。古くは修行所であったともされ、体力のない老人や女人はここまで登ってきて白山を遥拝(ようはい)したと伝えられています。

桧神宮からしばらく行くと加賀新道との合流点で、標識にはしかり場分岐点(1,549m)となっています。しかり場は「しかりば(は)る」からきており、女人禁制の白山で酒を売ろうとして美女を従えて登ってきた老女が、神の怒りに触れ地が裂けて深い谷となり老女は石になってしまったとされる伝説があります。現在ここからは白山山頂部が望め、地形的にみると「伏拝」の場所であったことも考えられます。

分岐点からはほぼ南北に伸びる尾根伝いに長倉山(口長倉)(1,661m)、奥長倉避難小屋そして奥長倉山(1,771m)へと単調な登り下りを繰り返します。植生はオオシラビソやダケカンバが顕著な亜高山帯の植生へと変わっていきます。

■奥長倉山から御前峰まで

奥長倉山からは一旦下った後、急な登りとなります。この坂は「美女(岩)坂」といい、先の「しかりばる」の伝説で老女が連れてきた美女が石にされ「美女岩」となった場所で、それらしい岩が坂の途中にあります。この坂を登りきれば美女坂の頭(1,968m)の道標があり、白山溶岩のひろがる緩斜面にでます。木々も徐々に少なくなりササの草原へと変わります。視界も利き、眼前には四塚山が立ちはだかり、対岸には緩やかな清浄ヶ原の平坦面が見え、遠く下界も見渡せるので別天地にきた感じがします。ほどなく「天池室跡」となります。室跡にはしっかりとした石垣が残っています。少なくとも江戸時代の後半には室(宿泊所)として機能していたようです。

天池室跡
後方右手に四塚山が見える

この先は尾根の東側をまくように進み、清浄ヶ原がよく視界に入ります。所々に池塘が見え、これを「精霊(しょうれい)田」といいました。

油池(2,090m)からは「長坂」と呼ばれる長い登り坂となります。植生もハイマツがみられます。途中ハイマツ帯の中に、ほれ込んだ道に岩が割れ、角張った石が敷き詰められた場所が続きます。これを「瓶割(かめわり)(破)

坂」といい、先の「しかりばる」の伝説で、美女が石になった後もなおも登りつづけた老女が酒を入れた瓶を割ったとされる場所です。

四塚山（2,530m）の山頂は北西から南東方向に平坦面が広がっています。ここは、「龍ヶ馬場」あるいは「竜馬の馬場」といわれ、仙人が竜馬（きわめて優れた駿足の馬）を調教した場所とされる所です。山頂には石積塚がありますが、この塚は麓の尾添集落で悪さをしていた 4 匹の猫を泰澄大師の弟子の浄定（きよさだ）行者が封じ込めた場所とされています。猫は後に助けられ、麓の「猫ヶ島（ねっかしま）（現在の白山一里野温泉スキー場の辺り）」に住み着いたとされています。

四塚山の石積塚

加賀室跡の石垣

四塚山から岩間道、釈迦新道の分岐の「月の輪のわたり」（一般には北竜ヶ馬場）といって遅くまで雪渓の残るところを過ぎると、七倉山と大汝峰との鞍部にあたる場所に「加賀室跡」があります。三つの馬場はそれぞれ山頂に室があったとされ、ここは加賀側のものとなります。石垣や土塁の跡がみてとれますが、江戸時代の後半には消失していたようです。なお、かつてここには営林署の小屋もありました。

大汝峰（2,684m）の山頂はここから300m登った所で石垣の中に大汝神社が建てられています。白山三山の一角をなす重要な聖域です。現在の社殿は平成 4 年（1992）に落雷で破損し新築したものです。ここから御前峰へは「千蛇ヶ池」を横切って山頂を目指しました。万年雪で覆われた「千蛇ヶ池」は泰澄大師が山頂で悪さをする千匹の大蛇を閉じ込めた場所とされ、雪が消えると上にある御宝庫（おたからこ）の溶岩が落ちてくると伝えられています。千蛇ヶ池から御前峰（2,702m）へ向かう道は、現在はありませんが、その登りの途中には「六道堂跡」があり、石垣と石仏が残っています。

美濃禅定道

美濃馬場－長滝白山神社

美濃禅定道は、現在の岐阜県郡上郡白鳥町から始まります。この道はおもに東海地方の人々が白山へ登るのに利用していました。起点の美濃馬場は「長滝白山神社」、「白山長滝寺」です。両者は、明治の神仏分離前は「白山中宮長滝寺」と称して一体化（神仏習合）していました。

「白山中宮長滝寺」の創建も泰澄大師と伝えられ、美濃における白山信仰の拠点としての勢力を有し、全盛時（平安時代末）には堂舎30余宇・6 谷 6 院・僧坊360を擁したと伝えられています。戦国時代になると浄土真宗の勢力が拡大し、末寺が転宗するなどその勢力が衰えますが、他の馬場のような焼き討ちに合うことも無かったようです。しかし、神仏分離後は僧坊の多くが離散してしまい、明治32年（1899）には火災で堂舎のほとんどを焼失してしまいましたが、その後復興し、現在も江戸時代とほぼ変わらぬ配置で神社と寺が共存しています。

長良川鉄道「はくさんながたき」駅前の参道の入り口には「天台宗白山長滝寺」、「白山神社」と記された石柱が建っています。参道をしばらく歩き、階段を上ると正面に長滝白山神社拝殿があり、左手には長滝寺大講堂のほか金剛童子堂や弁天堂などの寺の施設があります。そして拝殿奥の一段高い位置に塀で囲まれた所に本殿があり、伊弉冊尊・伊弉諾尊・天忍穂耳尊・火々出見尊・大己貴尊・菊理媛尊を祀っています。

長滝白山神社（本殿）
（岐阜県郡上郡白鳥町）

白山中居神社と石徹白

美濃馬場にはもう一か所、信仰の拠点の神社があります。長滝白山神社から桧峠を越え、石徹白地区にある白山中居神社です。神社名の「中居」は白山山頂の本社と長滝寺との中居(中間)に位置したことによるといわれています。石徹白は周囲を山地で囲まれた盆地状の地形をなすところであり、白山中居神社を中心に白山信仰と共に生きた社家・社人(神社に仕えた人々)の村でした。江戸時代までは全域が神社の神領で年貢は免除され、苗字帯刀も許されていました。人々は、夏は白山登拝者の宿泊の世話や道案内をし、冬は各地の信者(檀那と呼ばれていました)をまわって布教活動をしていました(このような布教者を御師と呼びました)。境内には樹齢1,000年を越えるとされる杉の大木が林立し、威風をなしています。

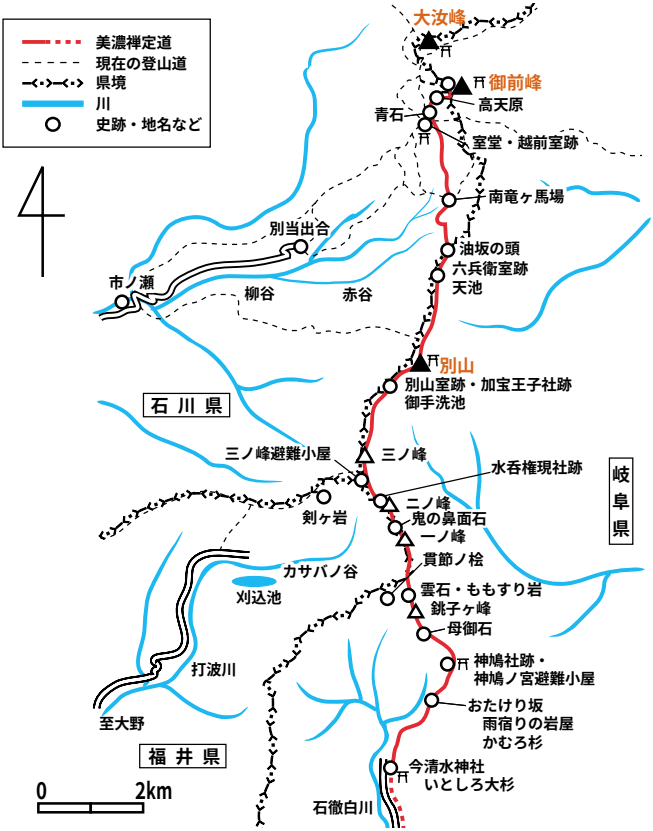
白山中居神社

美濃禅定道を行く

■いとしろ大杉から三ノ峰避難小屋へ

現存する登山道は白山中居神社からさらに奥の「いとしろ(今清水)大杉」からはじまり、石徹白道(南縦走路)として利用されています。「いとしろ大杉」は、泰澄大師の挿した杖がこの大きさになったといわれており、推定樹齢1,800年、周囲約13mもある老大木です。昭和32年に国の特別天然記念物に指定されています。大杉のそばには「今清水社跡」があり、現在は小さな祠があ

いとしろ大杉



美濃禅定道図

ります。もとは修行所で社殿、拝殿などもありました。

ここから森林帯の尾根伝いの道を登ります。途中、「おたけり坂」と呼ばれる急坂があります。ここは女人禁制を犯し、泰澄大師とともに白山を目指した大師の母が結界（けっかい）を超え神の怒りにふれ、大変な試練を受けた場所とされています。「おたけり坂」の間には、大師の金剛杖が生え付いたとされる「かむろ杉」と大師の母が血の雨・槍の雨を雨宿りされた「雨宿りの岩屋」もあります。傾斜が緩やかになってくると、神鳩ノ宮避難小屋につきます。

ここは「神鳩社跡（かんばたしゃ）」で、ここにも社と室があり美濃禅定道と別の修験者の修業道とがここで合流する場所でした。現在、社跡には小さな石祠があり、その手前

の広場(避難小屋のある所)に室があったようです。

この神鳩ノ宮避難小屋までは森林帯を行きますが、ここからしばらく行くと稜線部に出てササ原が続き視界が広がり、景色が一変します。ここからは「上品の世界」といって、白山の神・仏の世界へと入って行く事になります。その稜線部の一角に「母御石(ははごいし)」があります。止められても白山に登ろうとし続けた泰澄大師の母を、大師が石を割って閉じ込めたとされており、石には大きな割れ目があります。神域へは大師の母であっても入れなかったというわけです。銚子ヶ峰(1,810m)も修行所であったとされていますが、ここを過ぎてしばらく行った所に「雲石」と「ももすり石」があります。「雲石」はササ原の中に雲のように浮かんでいることからこの名前がつき大小二つの石からなります。「ももすり石」は両側から二つの石が登山道をはさむようにあり、通るときには体のどこかが触れてしまうのでこの名が付いています。西側の眼下に「貫節(つなぎぶし)の桧(ひのき)(檜)」を見ながら一ノ峰(1,839m)を過ぎ、二ノ峰(1,962m)の頂上近くで「鬼ノ鼻面岩(おにのはなづらいわ)(天狗岩)」を見ることができます。稜線部にそそり立つこの岩は、現在の打波川流域の刈込池(福井県大野市上小池)に睨みをきかすようにそびえています。前は鼻のような突出部がついていましたが崩れてしまいました。刈込池には泰澄大師が退治した悪蛇が封じ込められており、その姿を残したのが「貫節の桧」であり、大蛇が出てこないか見張っているのが「鬼ノ鼻面岩」です。鳩ヶ湯新道沿いの「剣ヶ岩」も刈込池の悪蛇を封じ込めています。

母御石

二ノ峰を過ぎ、しばらくいくと「水呑権現社跡」にでます。ちょっとした広場になった場所で神鳩社と別山社の中間の修行所でした。礎石の跡や石祠跡があります。ここにあった仏像・仏具は麓の石徹白にある大師堂に安置されています。

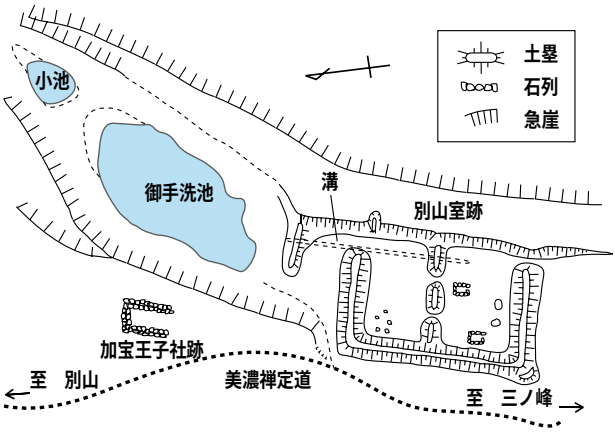
■三ノ峰避難小屋から室堂へ

三ノ峰避難小屋、三ノ峰の頂上をへて平坦な面が広がる別山平にでます。ここには「加宝王子社(かほうおうじ)跡」、「別山室跡」、御手洗池(みたらしいけ)があります。加宝王子社の祭

神は天太玉之尊、本地仏虚空蔵菩薩とされ、別山の方向にコの字型に石積みが残り、別山の拝殿であったとされています。別山室跡には土塁と石積みの遺構が残されており、室には管理する人がいて宿泊者からお金をとって宿泊に利用していたようです。

別山(2,399m)へは、別山平から急坂を登ります。御前峰、大汝峰とあわせ、信仰上の白山三山の一角をなす別山は、美濃禅定道を登るとき、眼前に気高くそびえ立ち、かつては別山までを石徹白の人々が支配していました。現在、この地にあった聖観音菩薩坐像は白峰村白山本地堂に安置されています。今は別山神社の祠があります。別山からは御舎利山、大屏風・小屏風を経て「六兵衛室跡」にでます。ここにも室があり天池のそばにあることから「天池室」とも言われていました。六兵衛という人が参詣の人に酒食の商いをしていたとの記録があり、しっかりとした石垣が残っています。また祠跡の石積み遺構も見られます。

ここからは油坂の頭を通り、赤谷を渡って「南竜ヶ馬場」に出ます。昔は竜ヶ馬場といい四塚山周辺(北竜ヶ馬場)と同様「仙人が龍馬を調教した場所」とされています。竜川(現柳谷川)を渡って、御前坂(現トンビ岩コース)を登ります。万才谷雪渓を横切ると室堂に出ます。「美濃室」はこの万才谷雪渓あたりにあったとされますが、正確な場所は不明です。室堂から御前峰山頂までは越前禅定道と同じです。



別山室跡及び加宝王子社跡
(石川県教育委員会(1998)より作成)

お　わ　り　に

この白山禅定道をまとめるにあたって三つの禅定道を歩きました。登山道区間のあるところだけなので、すべての道を歩いたことにはなりませんが、ほぼその道を歩いてきました。加賀禅定道の美女坂のつらい登りを終えた後に、はるかかなたに加賀平野を望み、眼前に四塚山や清浄ヶ原の雄大な景色を見たときは思わず感動し、拝みたくなる気持ちになりました。反面、美濃禅定道の一ノ峰、二ノ峰、三ノ峰のアップダウンにはほとほと疲れ、遠くに見える別山の山容が恨めしく思えてなりませんでした。これが山登りの楽しさでもあり、つらさでもあるのかなあと改めて思い、昔の修行者の方達の偉大さを実感させられました。

白山の禅定道の成立が 9 世紀後半であるとするならば、実に1,000年以上の歴史を持つ道ということになります。その古道の歴史の重みを感じつつ、道沿いの史跡などに触れながら登るのも良いのではないでしょうか。

本誌を作成するにあたり特に下記の文献を参考にしました。著者の方にお礼申し上げます。

石川県教育委員会（1998）信仰の道．歴史の道調査報告書第5集，能登印刷，154p.
上村俊邦（1993）石徹白から別山への道．白鳥印刷，132p.
上村俊邦（1997）白山の三馬場禅定道．岩田書院，212p.
栂　典雅（1999）旧越前禅定道をたどる．はくさん，27-1，2-5.

写真提供　　辰口町立博物館、白山本地堂、上馬康生、神田健三、栂　典雅

白山の自然誌　21

白 山 の 禅 定 道

発 行 日　平成13年3月30日
文・構成　小川　弘司
編集・発行　石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村字木滑ヌ4
Tel. 07619-5-5321　Fax. 07619-5-5323
E-mail　hakusan@pref.ishikawa.jp
印　　刷　（株）橋本確文堂

R100 本誌は古紙配合率100%の再生紙を使用しています